

主 題：あなたへの祝福を忘れない2**聖書箇所：エペソ人への手紙 1章17-19節**

エペソ人への手紙1章をお開きください。

パウロはエペソの教会に宛てたこの手紙の中で、教会のクリスチャンたちのためにとりなしの祈りを捧げています。6章からなるこの手紙の中に彼のとりなしが2回出てきます。きょう私たちが学ぼうとしている1:17からと、もう一つは3:14からです。なぜパウロがこの教会の人々のためにとりなしをしたのかと言うと、それはこのエペソのクリスチャンたちが信仰者として成長するためです。パウロはエペソの教会の人々に、まさに神学校で教えるような非常に難しい、そして重要な教理を教えています。しかし、それだけでは十分ではないことをパウロはよく知っています。問題なのはどれだけ知るかではなく、知ったことを生かすかです。ですからパウロは、教会の人々が学んだ大切な真理を彼らの実生活の中で生かしていくようにと願って、彼らのためにとりなしをなすのです。

きょう私たちが学んでいくのはそのパウロのとりなしの祈りです。なぜこの祈りを学ぶかと言うと、それはパウロが祈った内容がエペソの教会のクリスチャンたちだけではなく、今現代の私たち、あなたにとっても大変重要な事柄だからです。あなた自身が成長するために、あなたがますます主に喜ばれる者として生きていくために、まさにパウロは祈りをもってその秘訣を教えてくれているかのようです。ですから、このパウロのとりなしの祈りを一緒に見ていきたいと思います。

☆ パウロのとりなしの祈り

エペソ1:16に「あなたがたのことを覚えて祈っています。」と記された後、17-19節に祈りの内容が記されています。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。」と。このとりなしの祈りでパウロが二つことを求めていることにお気づきになったと思います。しかもまずパウロはこの二つの祈りの内容を記した後で、その祈りの目的を記しています。例えば17節で「知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」とパウロは祈りました。そしてその上でその目的は彼らが神を知るためであると記しています。また18-19節でパウロが祈ったのは、「あなたがたの心の目がはっきり見えるように」なるようにということです。そしてその目的は、あなた方が三つの神様の恵み、祝福を知ることができるように。そして彼はその三つの祝福を記してくれています。

ですからパウロは神を知ること、そして神の恵み、祝福を知ることがを願って神の前にとりなしの祈りをなしたと言うことができます。パウロの祈りを一緒に見ていきましょう。

A. 一つ目の祈り：知恵と啓示の御霊を与えてくださいますように 17節**1. 神の真理とともに生きるために：心が聖霊によって支配され続けるように**

まず17節「知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」と記されています。この文章だけを読むと、確かに彼らは御霊を持っていなかったから御霊が与えられるようにと願っていたと見ることができます。でもこの手紙は、エペソの教会のクリスチャンたちに送られているのですから、それはおかしいわけです。パウロはそのクリスチャンたちのために祈っているのです。クリスチャンであればみんな御霊、つまり聖霊なる神様をいただいています。聖霊なる神をいただくことによって私たちは救いにあずかったと言えます。ですから聖霊を持っていない、聖霊が内住していない人たちに対するメッセージではないのです。

パウロがこの祈りを通して、神の前に願ったことは、既に与えられている聖霊が彼らのうちでもっと強められていくことでした。少し言い方を変えると、信者ひとりひとりの中で聖霊がますます活発になるように、ますますひとりひとりを聖霊が支配し続けていくようにという意味です。エペソ5:18に「御霊に満たされなさい」、ガラテヤ5:16では「御霊によって歩みなさい」という命令があります。どちらも同じことを言っていることを我々は既に学んできました。聖霊なる神様によって心が支配され続けることを命じたのです。エペソのクリスチャンたちはそのように生きていたはずですが、そこでパウロは彼らがますますそのように歩んでいくように、彼らの心が聖霊によって支配され続けるようにと望んでとりなしをしたのです。

17節の祈りは特に「知恵」と「啓示」という二つのことばに注意してください。「知恵」ということばの意味は神様のみこころが明らかにされた時にそのみこころを實踐していくということです。聖書で「知恵」ある人というのは、神が教えてくださった真理を毎日の生活で適応できる人のことです。聖書の箇所を知ってはいいても、それが実践に生かされていなければ「知恵」ある人とは言えません。

「啓示」というのは、神様のすばらしさや神のみこころが明らかにされていくことです。今私たちは神の「啓示」が記されている聖書を持っています。これは神が意図的に私たちに与えてくださったもので、神が我々に知らしめようとしたことが記されています。神様がそうしてくださらなければ、我々は神の真理を知ることはなかったのです。我々は「啓示」を通して神を知ります。我々は「啓示」を通して知らなければならないことを知るようになるのです。

ここには「知恵と啓示の御霊を」と書いてあります。聖霊なる神様の働きです。聖霊なる神は私たちに神の真理を明らかにしていってくれます。もちろん教会の中には教えるという賜物を持った者たちがいます。でもその賜物を持っていなかったら神の真理を知ることはできないのかということではありません。皆さんが初めて聖書を手にした時、恐らく新約聖書マタイ1章からお読みになって、カタカナがずっと並んでいて、読んでいてもわからない、難しく途中で疲れて眠ってしまったというようなことがあったかもしれません。ところがイエス様を信じた後、同じ箇所を読んでいても、ああこんなことを言っているのだと、わかった時の感動を覚えておられると思います。なぜかという、あなたのうちに教師である聖霊が与えられているからです。その聖霊なる神様があなたにその真理を示してくださり悟らせてくださる。聖霊はそういう働きをします。同時にその聖霊はただ真理を明らかにしてくれるだけではなく、あなたのうちに働いてそれを実生活で実践できるように助けてくださるのです。聖霊なる神様は感謝なことに私たちのうちにこういう働きをなしてくださるのです。

2. 神を知るために：揺るがない信頼を持って生きる信仰者となるように

17節にあるように、我々はそのことを通して神を知るのです。「知る」ということばを聞いて、私たちが最初に思い描くことは、何かに対しての知識を得るとか、知識を蓄えるということです。私たちは、どれだけ多くのことを正確に知っているかどうか、これを覚えていなさいと、そういう学校教育を受けてきました。しかし、聖書の中でこの「知る」ということばの意味はそれだけでない。「知る」ということばを見る時に私たちが覚えるべきことは、私たちの行いに影響を及ぼしていくということです。例えばユダヤ人たちにとって、「神を知る」というのはただ神様に関してのいろいろな教理を覚えていく、神を知的に理解することではなかったのです。神のみことばに従って従順に歩むこと、それが彼らの言う「神を知」っているということでした。ですから「神を知る」と言ったら、どれだけ情報を得ているかではないのです。「神を知」っている人たちというのは、神が言われたことを守り行っていくとすると、そのことによってこの人たちは「神を知」っているのだということが証明されていったということです。

ヤコブはヤコブ2：17-18で「それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。さらに、こう言う人もあるでしょう。『あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。』」と言っています。ヤコブは「行ないによって、私の信仰を」、つまり私のことばだけではなくて私の行いをもって、私がイエス・キリストを信じているということを明らかにすることができるのだと言っているのです。信仰というのは必ず行いが伴うからです。続けてヤコブはこう言います。「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」つまり情報だけを得ているとするならば、悪霊だって同じだと言うのです。あなたは神がおひとりだと信じている、悪霊もそう信じていると。でも悪霊は救われていません。そのことを明らかにするのです。そして「ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか。私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。」つまり彼は、アブラハムはイサクを捧げるといふ行為をもって神を信じているということを証明したと言っているのです。イサクを捧げるといふ行為が救ったのではない。彼は神を信じていたゆえにその行いをもって信仰を持っていることが証明された。なぜなら神の下さる信仰というのには必ず行いが伴うからです。ですからヨハネが「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。」(1ヨハネ2：3)とはっきり教えています。「私たちが神の命令を守るなら」、あなたが神の命令を守るならその行為によってあなたが神を知っていることがわかると。

ですから、みことばが私たちに教えてくれていることは、「神を知」っているということばだけではなく、その人の生き方が証明すると。そしてその生き方があれば、その行いがあれば、それによってその人が本当に「神を知」っていることが明らかになると言うのです。

もし、今の教会の問題は何かと問われたら、多分こんなふうに答えることができると思います。それは主について知的に知っている人は多いけれども、実生活を通して主を知っている人が大変少ないということです。今言っていることを考えてください。主について知的に知っている人、つまり情報を持っている人はいっぱいいるのです。神がどんな人なのかを知っている人はいっぱいいるのです。問題は実生活を通して主を知っているかどうかです。我々が主を知るためには実生活を通して確証を得ることが重要です。例えば主は全能だと頭で知っている人がいるとしましょう。でも神にはどんなことでもできるという確信が希薄かもしれない。それは希望が持てない状況に遭遇した時、主を信頼しないからです。でももし私たちが主を信頼して主がみこころをなさることを信じるなら、その信仰の歩みを通して私たちは神は確かにどんなことでもおできになるのだという確信が増していきます。そうして我々は全能の神を知るようになるのです。

私たちはいろいろなマスコミを通して発信される情報で、たくさんの著名人のことを知ることができます。でもその人と個人的に時間を取ってみないと、その人のことを本当に知ることはできません。マスコミがいろいろと教えてくれて、ああこの人はこんな人だったのだと情報を得ることはできます。でもその人と時間を取ることによって初めてその人のことをより深く知ることができるのです。信仰者の中にも神についての情報はいっぱい持っている人がいます。でもその方を個人的に深く知るためにはその方との時間が必要なのです。我々がだれかを個人的に知るのと同じように、神との個人的な時間を通して我々も神を個人的に知っていくのです。少し問いかけてみなければいけないことは、私はことばだけの信仰者になっていないかどうかです。知識があるから、いろいろな質問には答えられるかもしれない。でも毎日の生活を通してあなたの神に対する確信は増しているかどうかです。

パウロという人物は確かに神を知っていました。情報だけではなかったのです。日々の生活を通して神への強い信頼を持っている人物でした。使徒27章あたりを見ると、パウロはカイザル、つまりシーザーに上訴したゆえに地中海を渡ってローマへと連れて行かれます。そしてクレテ島まで来た時、本当は海が荒れて航海するのは危険だから、クレテ島で冬を過ごそうとしていました。でも非常に天候がよくなったので、このままローマまで行けると思ったのですが、そううまくは行きませんでした。大変な嵐によって自分たちの身が危険にさらされるのです。その時にパウロが乗船していた者たちにどんなことを話したのかが使徒27：23に記されています。「昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って」こう言ったと言うのです。こういうことが起こったのは、まだ聖書のおことばが完成していなかったからです。みことばがまだ完成していない時には神はこういった方法で神のメッセージを伝えました。残念ながら今は神様はこういう方法で私たちにお働きになることはありません。これはもう過去の話です、でもこの時に神は確かにパウロに現れて24-25節でこう言うのです。「あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。」ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりになると、私は神によって信じています。」、これが、神の言われたことは必ずそうなるのだというパウロの信仰です。

これはただ知識を持っている、そういう信仰者から二歩も三歩も成長した信仰者の姿です。日々の生活において危険に遭遇している中であって、神がこう言われたから私はそれを信じますと。経験のある船乗りのことばや海や風を読むことのできるキャプテンの話ではなかったのです。彼は神の言われたことを信じたのです。それは彼が信仰者としての歩みを通して個人的に神を知っていたからです。そういう人に私たちが変えられていくことを神は望んでいるのです。主を信じる、どんな時にも主を信じ切るそんな信仰者が必要です。神を信じるのは自分の欲しいものを得るためではありません。たとえ願っていることがかなえられなくても、願っているものが与えられなくても、物事が自分の思いどおりに進まなくてもたとえどんな苦しみが増し加わっても、主を、そして主のおことばを信じ続けるという、信じ従うという信仰者が必要なのです。ひとりひとりが自分に問いかけてみなければいけないのは、私はそんな信仰者として成長しているかどうかです。そんな信仰者を神はお喜びになっておられる。そんな信仰者を用いて神はみわざをなしてこられたのです。今この21世紀にあって、そんな信仰者がどれぐらいいるかです。パウロはエペソのクリスチャンたちが知識を得るだけではなく、日常生活において本当に神を知ってどんな時にも神のみことばに立って生きる、揺るがない信頼を置いて生きる信仰者へと彼らが成長していくことを願っていたのです。それがまず最初にパウロが祈ったことだったことをこの箇所は我々に教えてくれます。

B. 二つ目の祈り：あなたがたの心の目がはっきり見えるようになりますように 18節

二つ目に18-19節に「あなたがたの心の目がはっきり見えるように」なりますようにと、パウロはとりなしをなすのです。目と言わずに「心の目」と言っています。なぜかというと、私たち人間の行動を生み出す所は心だからです。この後パウロは神様のすばらしさ、神がなしてくださったすばらしいみわ

ぎ、そして我々信仰者ひとりひとりに与えられているそのすばらしい祝福を明らかにし、それを正しく理解することによって各信者の生き方がより神に喜ばれるものになっていくようにと願ったのです。パウロはただ情報を提供する、それでよしとしなかったのです。それを明らかにすることによって聞いたひとりひとりの生き方が変わっていくように、そのことを願ってパウロは信者に与えられたすばらしい三つの祝福、三つの恵みを明らかにするのです。

1. 神の召しによって与えられる三つの祝福 18節

1) 御国を受け継ぐ者とされた

18節に「あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか」を知るようにとあります。かつての生まれながらの我々はだれひとりとして望みを持っていませんでした。エペソ2：12に「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」とあります。我々は自分の思いのままに、好き勝手に生きていた。そして自分たちに一番ふさわしい永遠の滅びを、永遠のさばきを受けるそういう存在であったと。救いに関して全く何の望みもなかった者たち。でもそんな私たちに神様は救いを与えてくださったのです。18節には「聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、」と続きます。神様は私たちにすばらしいものを受け継ぐことができるようにと。そしてエペソ1：14に「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。」とあります。私たちが受け継ぐのは「御国」だと記してくれています。しかもあなたが「御国」を受け継ぐことの保証として神は聖霊を与えてくださった。最初にもお話ししたように聖霊なる神をいただいている者たち、聖霊なる神が内住している人たちというのは救いにあずかった者たちです。救いにあずかっている者たちには天国が約束されている。それがあなたが受け継ぐものであると。だとすれば、天国に入れるその日を待ち望みながら私たちは歩むはずです。

アブラハムというすばらしい信仰者がどのように歩んだのか、ヘブル人への手紙の著者が教えてくれています。彼は自分の生まれた故郷をいつも思いながら生きていたのではない。ヘブル11：16に「彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。」とあります。アブラハムはこの地上のことよりも約束されているすばらしい都、天の住まいを覚えながら生きていた。私たちがそう生きるべきです。イエス様は私たちに地上に宝を積むのではなくて、天に宝を積みなさいと言われた。なぜかというと、永遠から見たらこの地上の生活はあつと言う間の出来事です。そしてその永遠を私たちは神とともに過ごせるのです。神様によってあなたにはもうちゃんと天に住まいを設けていただいている。我々はもう天国民とされたのです。行くところは決まっているのです。だとしたら我々は天国民としてどんな大きな祝福をいただいているのか、そのことを世に示すために今この地上に置かれているのです。そうやって生きていくことです。我々は死んでも神とともに生きるのだ、住まいはもう天に備えられているのだと。アブラハムは天の故郷にあこがれ、そこに行くことを待ち望みながら日々を過ごすことができた。あなたも私もそうやって生きていけるのです。いろいろなことが起こってくるけれども、感謝なことにそれはすべて神がご存じであり、神の助けはそこにあります。あなたはひとりでこの地上の旅路を歩んでいるのではない。神があなたとともに歩んでくださっている。そして確実にあなたを天の住まいへと導いてくださる。こんな約束をいただいた者として、こんな祝福を受け継ぐ者とされた私たちはそれらしく生きることです。

2) イエス様の再臨

二つ目の望みはイエス様が再臨されることです。これは我々クリスチャンにとっての大きな望みです。パウロは「祝福された望み」であるとテトス2：13で教えています。「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」と。パウロたちはそう生きました。きょうイエス様が帰ってきてくださるかもわからないという希望を持って彼は生きていたのです。なぜならこれがクリスチャンの望みだからです。我々もそう生きることです。イエス様はもう帰って来てくださる。あなたを彼のもとに迎えてくださるためにです。神の召しによって与えられる望み、それがどのようなものか知ってほしいと。あなたには天国という望みがある。あなたには主があなたを迎えにきてくださる再臨という望みがある。

3) 栄化

そして三つ目に挙げるとすれば、栄化です。栄光のからだに変えられるということです。なぜなら我々がイエス様にお会いした時に私たちはこの罪のからだを完全に脱ぎ捨てて栄光のからだを着るのです。罪を犯すこともない、神を悲しませることもない。我々が主にお会いした時に、罪のない栄光のからだを私たちは主からいただくのです。ヨハネはIヨハネ3：2で「愛する者たち。私たちは、今すでに

神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と言います。これが我々の希望です。イエス様にお会いするのです。そしてその時にこの厄介な罪の肉を脱ぎ捨てて、私たちは栄光のからだをいただくことができると。信者である私たちに与えられた望みは天国であり、再臨であり、そして栄光のからだに変えられる栄化である。これは神様が私たちに約束されたものであり、そしてこれは確実にあなたに与えられます。

先ほど、神を知っているということは必ず行いでもって証明されると言いましたが、ヨハネの手紙でヨハネが同じことを教えてくれます。先ほど見たⅠヨハネ3：2に「キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者」に変えられると記されていました。その次の3節に「キリストに対するこの望みをいただく者は」とあります。そしてその後「キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と続きます。神が教えてくださるこの真理は、私たちに神が喜ばれる行いを生み出して行くということです。先ほどから私たちが見ているように、私たちの信仰というのはただ情報をたくさん蓄えることではないのです。私たちは神の憐れみによって真理を知ることになります。それは神の働きです。我々は真理を知った時にその真理に従って生きる者へと変えられていくのです。その働きをなしてくださるのが聖霊だと。変態というイエス様に似た者に変えられていくという働きはイエス様を信じたその時から始まっているのです。それが終わりを迎えるのは栄光のからだをいただく時なのです。だから我々がしっかり気づかなければいけないのは、信仰というのは神が下さった恵みであるとともに私たちを変えていくという力を含んだものであるということです。神に逆らっていた私たちが、罪の奴隷であった私たちがそこから生まれ変わって、神を愛して、神に従う者へと変わった。我々が神の真理を知ることによって真理に従って行きたいという願いを神が私たちに与えてくださる。そして実はそのことを可能にしてくださるのも神だと、このテキストは私たちに教えてくれるのです。

2. 神が信仰者に受け継がせる栄光に富んだもの 18節

それを学ぶ前に続けてみことばを見て行きましょう。

一つ目にパウロが知るようにと願ったことは、神の召しによって与えられる望みがどのようなものなのか、神の召しによって、神様によって救われた者たちに与えられる望みがどんなものかを見てきました。二つ目に彼は、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものかと言っているのです。相続の話です。神が信仰者であるあなたに与えてくださった相続について、これも三つ出てきます。

1) 永遠のいのち

まず一つ目は永遠のいのちです。イエス様はマタイ19：29で「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぐ」と書かれています。神様はこの救いにあずかった者に永遠のいのちを相続として与えてくれるということです。

2) 地上における働き

二つ目はこの地上における働きです。もちろん今私たちが生きているこの地上においても働きをなすのですが、言っているのはその先の話です。イエス様がクリスチャンを伴って地上に帰って来られた後、主イエス・キリストは地上に千年の王国を築かれます。その時、我々は既に黙示録の中でそれを学んできましたが、イエス様を信じることによって、あなたは祭司とされました。だから地上にいる間、人々のためにとりなしているのです。人々にこの救いのすばらしさを伝えていくのです。そしてイエス様がこの千年王国を築かれた時に、あなたは「神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」と黙示録20：6が教えます。ということはイエス様と地上に帰って来た後、あなたも私も祭司としてキリストとともにその王国を治めるという役割が相続として与えられているのです。このような祝福を神様は私たちに約束してくださった。

3) 神の約束

三つ目に私たちが覚える神が我々に下さった相続というのは神の約束です。みことばの中に神様が数々の約束を与えてくださった。実はそれが私たちに對する相続です。我々は神様の約束を信じて、それを期待して歩いていくのです。信仰の勇者たちはそうやって生きてきた。彼らは自分の目が見ることではなくて神様の約束を信じてそれに従って来ました。神様は私たちにも数多くの約束を下された。そしてそれに従っていこうとする。

救いにあずかった者たちが神様からいただいた望みがどんなものなのか、また救いにあずかった者たちが神から受け継いだものがどのようなものなのか、神は私たちに罪の赦しを下さり、永遠のいのちを与えてくださり、天での住まいを設けてくださり、この地上でも神とともに生きることが赦され、その

後も神とともに生きることが赦されている。どんなに大きな祝福を神様があなたに与えてくださったのか、もっと気づかなければいけない。パウロが祈ったはずです。あなたたちの心の目が神様が下さったこのようなすばらしい祝福をはっきり見えるようになることを。それがわかれば、あなたたちはそれに応じた行いをして行くでしょう。少なくともそれに対して感謝を表す人になるでしょう。前回も見たように私たちが神をほめたたえ続けるのは、この方が神であるし、この方が祝福を下さったからです。だから神をほめたたえつつ生きて行く、生まれ変わった私たちの新しい生き方ですけれども、そのように生きていくためには神がどのように大きな祝福を私にくださったのか、そのことをしっかり覚えていないといけない。パウロは言います。神に喜ばれるように歩んでいくためには、神があなたに与えてくださったその祝福をしっかりと覚えていなければいけないと。神をほめたたえるだけではない、神の教えてくださっていること、神の命じておられることに従って行くためにも我々は神の祝福をしっかりと覚えていなければいけないと。

3. 私たちに働く神のすぐれた力 19節

さて、ここまで来た時に多くの人が思うのは、でも自分は信仰が弱いですと。必ずそういった声を聞きます。もしかしたら皆さんがそう言っているかもしれない。私は本当に信仰者として弱いのです。見てください、その後、三つ目に与えられた祝福についてパウロは教えてくれます。19節のところに。

「また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることが出来ますように。」、パウロが三つ目にあなたたちがどうしても知らなければならぬこととして挙げたのは、この神の力の話です。

1) 神様の“ちから”

19節を見ると、私たちが神様にいただいている大きな祝福の中の一つがこの神様の力だとあります。「神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力」、パウロはここに「力」と訳せる四つのギリシャ語を使っています。まず最初は「神のすぐれた力」、デュナミスというギリシャ語を使っています。これは「その人の固有の力」とか「先天的な力」です。そしてその「力」の説明が三つの異なることばを用いてなされています。まずパウロが言いたかったのはあなたたちには神が先天的に持っておられる神の力が与えられている、そしてその「力」を説明するためにこの後に三つのことばを使っています。「神の全能」、その後に「力」、そして「働き」という三つのことばです。この「全能」というのはユシカスというギリシャ語ですが、「最高の力」とか「能力」、特に「最高の力」という意味です。次は「力」で、クラトスというギリシャ語を使っています。この根本の意味は「完全にする」ですが、「実力」や「支配力」、「権力」という意味です。三つ目が「働き」、エナゲイヤということばです。「エネルギー」や「活発な」、「働いている」とか「動力」、実際に働くための力という意味です。

2) 力が与えられている意味

パウロはあなたには神の力が与えられている、その真理を伝えるのですが、それだけではなく、その「力」が与えられているということはどういう意味なのかを教えてください。パウロはこの箇所を通して信仰者ひとりひとりに対して、あなたに与えられた力は神様の命令に従って行くことができる「力」なのだを教えています。これは修辭的な疑問文ですから皆さんの答えはわかっています。また皆さんは私が望んでいるような答えを出してくださらなければ困ります。あなたは神様の平安をいただいていますよね？答えはイエスですよね。ということはどんな時でも主イエス・キリストのように平安を持って生きることができるのでしょうか、できないのでしょうか？ここで自分ができているかどうかを思って、答えるかどうかを考えないでください。そんなことを言ったらだれも答えられない。イエス様が持っておられた神様の平安をいただいたのでしょうか？イエス様はどんな時にも平安を持って生きておられた。ということはその平安が与えられているという以上、我々もイエス様と同じようにどんな時でも平安を持って生きることができるのでしょうか？例えば、神の喜びはどうですか？あなたは神の喜びをいただきましたか？それなら、どんな時でもイエス様のように喜びを持って生きることができるのでしょうか？なぜならイエス様が生きたようにあなたも私も生きて行くことができるからです。だから多くの人にあなたは神様の平安をいただいていますか？喜びをいただいていますか？と聞くと「はい」と答えます。ではなぜ平安を持っていないような生き方を許してしまうのですか？なぜ喜びのない生き方を許してしまうのですか？矛盾していると思いませんか？神の約束は平安を持って生きられるのです。喜びを持って生きられるのです。ではなぜそんな生き方は私には無理だと思っている人が多いのでしょうか。パウロはこの四つのことばを使って、神があなたにできるのだと約束してくださったものは必ずできるのだということをおあなたがしっかりと心に刻むことを願って、このメッセージを記しているのです。できると言われた神は、それを実践するために必要な力を十分にあなたに与えてくださっているのです。できるのだということをお神ご自身が保証してくださった。ですからパウロはできないとか自分には無理だという

人を諭して神を信頼しなさいと教えようとするのです。

神が私たちに下さった救いというのは、ただ天国を約束しただけではない。あなたや私をキリストに似た者に変えていく力を持った信仰です。それが神様の祝福なのです。あなたも私もイエス様に似た者に変えられていくのです。性格もそうだし、我々の習慣もそうだし、疑い深かった弱さも克服することができるのです。できないとか、私は役に立たないと嘆いていたあなたが神にとって役に立つ者へと変えられて行くのです。この偉大な神様にとって役に立つことのできる者、キリストの栄光を現しながら生きることのできる人へと神はあなたを変えて行ってくれるのです。その力があなたに与えられているのだとパウロは言うのです。その後20節を見ると、キリストの復活の話をしています。あなたに与えられた力というのはイエス・キリストがああ死から敢然とよみがえってきた、その力ですと。なぜ疑うのだと。

きょう私たちは神を知ること、神の恵みを知ることを見てきました。神を知るためには、日々の生活を通してみことばの実践が必要なのだということを見てきました。もしあなたが主のみことばを心から受け入れてその教えに従っていかうとしていないなら、神のおことばを聞いてもその教えに従っていかうとしていないならば、それはあなたがあなたの生活から主を締め出していることになります。なぜかという、神はあなたを通してご自身を明らかにしようとしてくださっているのです。あなたや私を通して神はこの神がどんなに偉大なお方であるかを明らかにするためにあなたや私を使おうとしてくださっている。その働きをとどめているのはあなたなのです。神ができると言われたのに、それを信じないのです。用いると言われているのに、私には無理だと言っているのです。我々は神の御力を知らなければならぬのです。そして私たちは喜んで主に働いていただく機会を提供し続けていくことです。神様、どうか私を通して、あなたのみわざがなされるように、あなたがこうしなさいと教えてくださったことを、あなたが与えてくださった力によって生きることによって私をもっとあなたを知るようにと。そしてあなたのすばらしさが私のような者を通して明らかにされていくようにと。私たちは主に働いていただく機会を提供することが必要です。その時に、知的にではなくて本当に主を知ることになります。なぜならあなたは、主は本当に偉大なおかただと確信するからです。それが神の望んでおられることです。そのように生きて行くことです。